



# 偶然を必然に、それがプロの仕事

第68回日本伝統工芸展 日本工芸会会長賞受賞

陶芸家

## 羽石 修二さん

(大町出身・59歳)



「受賞はとても驚きました。受賞作品は今までの作品より楕円型で自然な感じ。肩の力が抜けた感じがよかったんだと思います」と話すのは、今年8月、第68回日本伝統工芸展で日本工芸会会長賞を受賞した羽石修二さん。これまでの陶芸家人生について伺いました。

それ以降、40年以上陶芸と共に人生を歩んでいます。  
**全てが独学**  
**自己流の作品づくり**

話す羽石さんから、想像を絶する努力と経験を積み重ねてきたことがうかがえます。  
**作品へのこだわり**

「小さくても存在感があり、時代の流れに左右されず、孫の代まで使い続けられる作品を目指す姿勢はずっと変わらないですね」と羽石さん。一方で、新しい表現方法を求めて、今も挑戦を続けています。

プロになってからの苦労もあつたといいます。「やってみたいという気持ちだけで薪窯を始めた。自己流で窯の設計や薪の種類などを学んだので、思い通りに焼けない時期が一番心が折れそうでした。ガス窯で焼いた作品で収入を得ながら、薪窯で焼いた作品はほとんど廃棄する日々でした」と振り返る羽石さん。薪窯で釉薬を使わない、焼き締めという技法が羽石さんの作品の特徴の一つです。

「夢を叶えるには『夢』ではなく『目標』として具体的に見据えることが大切」と羽石さんから、夢を持つ若者へメッセージを頂きました。

### 若者へメッセージ

中学3年のときに美術クラブで陶芸に触れ、強く興味をもつたといいます。高校は京都の美術工芸高等学校陶芸科に進学。母親に勧められた高校でしたが「実は、母は将来どんな職業にも役立つデザイン科を勧めたのですが、私が勝手に陶芸科を受けてしまったことに驚いていました」と陶芸家としての原点を話してくれました。

「薪窯だと、窯から出すまでどんな作品になるか分からないですよねとよく言われます。でも、偶然を必然にするのがプロ」と

生涯現役で陶芸を続けたいと言う羽石さん。これからの活躍にも目が離せません。



受賞作品「窯変筒花器」